令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

(1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。

(2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。

(3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1　調 査 日　令和６年４月１６日（火）

2　調査対象　品川区立学校　第２～９学年の全児童・生徒

3　調査内容
教科に関する調査
→　調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第２・３学年>　国語、算数
<第４～５学年>　国語、社会、算数、理科
<第　６　学年>　国語、社会、算数、理科、英語
<第７～９学年>　国語、社会、数学、理科、英語

品川区立芳水小学校

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から
明らかになった課題と学力向上に向けた取組（国語）

１．国語の定着状況についての概要

どの学年も全ての項目において目標値、全国平均を上回っている。しかし、区平均との比較になると項目によっては区平均をやや下回る学年も見られた。平均的な国語力はあるが、「書くこと」、「情報の扱いや文章の読み取りに関する事項」、「漢字の読み書き」において課題が見られる。学年ごとに明確になった課題に取り組むと共に、上記の領域については学校全体として取り組んでいく必要がある。

２．具体的な課題

①　漢字を適切に読んだり書いたりすること、ローマ字の定着や国語辞典の使い方など言語事項についての学習において課題がある。

②　叙述を基に文章の内容を掴んだり、情報と情報との関係について理解し、段落相互の関係を捉えたりすることに課題が見られる。

③　指定された長さで文章を書くことや、課題に合うように自分の考えを書くことに課題がある。

３．課題の原因として考えられること

①　漢字に苦手意識をもっている児童が多い。音声言語に触れる機会が増える一方で、既習の漢字を使って文章を書いたり、すすんで読書に取り組んだりすることが不足しているため、漢字が覚えられなかったり、語彙が少なかったりする。

②　求められている情報を正しく読み取り、適切な内容を書くことが十分にできておらず、誤答につながることがある。

③　設問の意図を理解した上で文章を書くことに慣れていない。記述で解答すること、自分の考えを書いて表現することに自信がない児童が多い。

４．課題解決のための方策（取組指標）

①　学習した漢字は日常生活の中で活用するように指導し、小テストを行いながら漢字の定着を図る。読書をする機会を増やすことで語彙を増やしていく。国語辞典を使った授業を行ったり、英語の授業でもローマ字扱ったりして言語事項の定着を図る。

②　目的を明確にしながら適切な言葉を用いて文章を書く活動を取り入れる。また、自分の考えを書く際には理由を具体的に書かせるよう指導する。

③　文章を書く機会を増やし、経験を積ませる。学習の中で目的を明確にしながら適切な言葉を用いて文章を書く活動を取り入れる。

５．次年度の数値目標（成果指標）

〇校内の平均正答率が、基礎と活用いずれにおいても、区の平均値を上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から
明らかになった課題と学力向上に向けた取組（社会）

１．社会の定着状況についての概要

・「平均正答率」「観点別正答率」ともに、目標値を上回っている。（４年生～５年生）
・６年生では、「平均正答率（基礎）」において、目標値は上回っているが、区の平均と同等である。また、「観点正答率（知識・技能）」においても、区の平均と同様の結果が見られた。
・全体を通して、単元によって定着に差が見られたが、ほとんどの項目において目標値や区平均、全国平均を上回っている。今後も、社会科に対して興味・関心が高まる授業を展開して、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにしていくことが大切だと考える。

２．具体的な課題

【４年】
・資料を読み取ったり、読み取ったことを基に判断したりする設問において課題が見られる。また、地図記号の定着が不足している。

【５年】
・「くらしをささえる水」において、節水のための工夫について考えることや、「ごみのしょりと利用」の学習における３Ｒについての理解に課題が見られる。

【６年】
・「日本の農業」における耕地整理についての設問に対する理解が不足している。
・「日本の食料生産」において、資料を読み取る設問に課題が見られる。
・「自動車をつくる工業」において、製造工程や関連工場についての理解が不足している。また、自動車工場の海外生産については、資料を基に表現する問題で課題が見られる。

３．課題の原因として考えられること

・単元によって、基礎的な知識の定着が不十分である。
・資料を読み取る際に、質問に対して注目する視点やポイントがきちんと把握できていない。
・学習を進める上で、資料を読み取るための十分な時間の確保ができていない。
・資料から分かったことを基にして、考える力が足りない。
・複数の資料を関連付けて考える力や、経験が足りない。

４．課題解決のための方策（取組指標）

・社会科が自分たちの暮らしや生活に密接に関わっていることを意識できるような効果的な資料提供を行い、社会的事象への関心を高める。
・資料を読み取ったり、まとめたりするための時間を十分に確保し、小グループや全体の場で共有したり、意見を伝えたりしてアウトプットする機会を意図的に設けるようにする。
・写真やグラフを扱う場面では、「いつのデータか」→「何を表しているか」→「どのようなことが考えられるか」などの基本的な読み取り方を定着させるとともに、自分の考えがもてるようにする。

５．次年度の数値目標（成果指標）

校内の平均正答率が、各学年の基礎・活用・観点別いずれにおいても、区の平均値を上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から
明らかになった課題と学力向上に向けた取組（算数）

１．算数の定着状況についての概要

どの学年も基礎･活用共に目標値の平均正答率を上回っている。区平均は一部の学年でやや下回るものの、全国平均は上回る結果となった。学校全体の取り組みとして「ねらいを明確にした授業展開」を行ってきたこと、また基礎・基本的な計算力の向上のための、計算ドリルによる日々の反復練習を行ったことが今回の結果につながったと考える。

２．具体的な課題

① 計算の基本的な知識や技能は身に付いていても、問題から必要な情報を読み取り、立式することを苦手とする児童が多い。

② 図形の作図、適切な単位を使って表すなどの習熟が不十分な学年がある。

③ 高得点をとる児童と、全体的な理解が不足している児童の差が特に中・高学年で大きい。

３．課題の原因として考えられること

① 文章題において必要な情報を、自分で読み取る活動が十分でなかった。なるべく早く正解にたどり着くために不正確だったり不十分だったりする式を書いてしまう。

② 知識だけ先行し、図形の定義や性質、また根本的な数の構造や計算式の成り立ちなどを十分に理解できていない。

③ 高学年になるほど、中学受験を見据えた学習を家庭で進める児童が増えることで上位層のボリュームが大きくなり、児童間の格差が拡がっていく。

４．課題解決のための方策（取組指標）

① 授業の中で、問題の読み方や問題場面の把握を丁寧に行う。必要に応じて問題文に線を引かせたり、丸で囲ったりさせる。

② 三角定規やコンパス、分度器を使っての作図を行う機会を増やす。作図の指導の際に根拠となる図形の性質を理解させ、見通しをもって作図する力を身に付けられるようにする。

知識や数量を生活や身近なものと結び付け、見当を付けたり推測したりしながら単位を活用できるようにする。

③ 単元や学習内容によって、個々の課題にあった教材を用意する。家庭にも学習成果を伝え、長期休暇の課題や日々の宿題などで復習できる環境を作る。

５．次年度の数値目標（成果指標）

○ 校内の平均正答率が、基礎と活用いずれにおいてもすべての学年で、目標値と区の平均値を上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から
明らかになった課題と学力向上に向けた取組（理科）

１．理科の定着状況についての概要

全体としては、目標値や全国平均を上回っている項目がほとんどである。学年や項目によって区の平均を下回っている。特に高学年の調査項目において多く見られる。単元によって理解度の差があるため、今後も体験的な学習や考察する時間を多く取り入れ、経験を積ませることで理解度を高めていく。

２．具体的な課題

・　「植物の育ち方」では、ホウセンカのつくりをもとにした他の植物の育ち方が推測できていない。
・　「じしゃくのせいしつ」において、鉄は磁石にくっつけると磁石になるという性質の理解に課題がある。
・　「音のせいしつ」において、音とふるえの関係から、演奏の方法について推測できていない。
・　「１年間の植物の成長」について、ヘチマの成長と気温の変化の関係についての理解に課題がある。
・　「動物のからだのつくりと運動」について、ヒトの腕の筋肉と動き方の理解に課題がある。
・　「月と星」について、方位磁針の使い方の理解に課題がある。
・「雨水のゆくえと地面のようす」について、土の粒の大きさと水のしみこみやすさの関係の理解に課題がある。
・　「水のすがた」について、水が凍り始めてからすべて氷になるまでの時間の理解に課題がある。
・　「植物の花のつくりと実」では、受粉が必要かどうかを確かめる実験について、改善の方法を説明できていない。
・　「ふりこのきまり」では、実験の方法と結果から、ふりこの条件を推測できていない。
・　「もののとけ方」では、グラフをもとに、食塩水を冷やした際の実験の結果を推測し、推測した理由を説明できていない。

３．課題の原因として考えられること

どの学年でもじっくりと観察したり、実験で確かめたりする機会が不十分だった。自然と触れ合う時間や場所が減少しており、日常の中の科学的事象との関連付けができなくなっている。グラフや実験結果などの情報から、考察の根拠となる部分を見つけたり、考えたりすることに課題がある。

４．課題解決のための方策（取組指標）

・　できるだけ実物や具体物の準備をし、準備できない場合はタブレット等の機器を活用して、体験や実験、観察する時間を多く確保する。
・　日常生活に関連する事柄を授業の中で積極的に紹介する。
・学習する単元に関連する知識だけではなく、その他の既習事項の復習も授業内で計画的に行うことで、知識の定着を図る。
・　理科の授業の中だけではなく、他の教科の授業や社会事象との関連を図り、横断的に学習を計画していく。
・　仮説を立てる→実験を行う→実験の結果をまとめる→考察する　という実験の手順を丁寧に行う。何を確かめるための実験なのかを明確に児童に示し、理解を促す。
・　条件を変えたり、揃えたりする中で、結果を予想しながら、何を確かめるために行うのかを説明させる。

５．次年度の数値目標（成果指標）

○　校内の平均正答率が、各学年の基礎・活用・観点別いずれにおいても、区の平均値を上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から
明らかになった課題と学力向上に向けた取組（英語）

１．英語の定着状況についての概要

英語に関しては目標値を全ての項目で上回っている。また、思考・判断・表現項目で区平均を上回っており、ＪＴＥと担任で協力し、目的意識をもって表現活動に取り組めるよう指導を工夫してきたことが、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の伸びにつながったと考えている。

２．具体的な課題

目標値は上回っているが、日常会話の理解力を測る問題の正答率が他の問題に比べて低い。

３．課題の原因として考えられること

日常会話における聞く力や語彙の習得の定着が十分ではない。

４．課題解決のための方策（取組指標）

・英語の学習の時だけではなく、日常的な単語は生活の中で使えるよう繰り返し定着を図る。
・担任とＪＴＥのスモールトークを積極的に取り入れ、日常会話を耳にする機会を増やす。

５．次年度の数値目標（成果指標）

校内の平均正答率が、各教科の基礎と活用いずれにおいても、今後も区の平均値を上回るようにする。